

クローズアップ NGO・NPO

社団法人

アジア協会アジア友の会

局長事務補佐・海外プロジェクトコーディネーター 熱田 典子

～活動30周年を迎え改めて考える「支えあい」～

アジアが共に支えあう基金設立

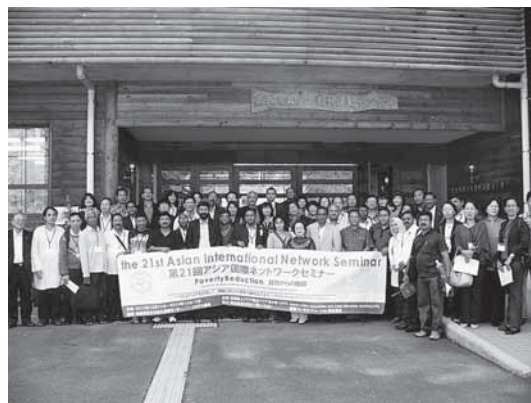
アジア協会アジア友の会（JAFS）は、飲料水の欠乏が深刻なアジアに安全な水（井戸）を贈る運動として1979年に活動を始めた国際民間協力団体（NGO）です。本会の特徴的な活動は市民の方々と共に作り上げていくことです。国際支援団体が近年大変増えた中で本会は2009年に30周年を迎え、今年は32年目の活動となりました。32年の活動を語るとすれば市民の皆様によって支えられ育った32年であると言えます。私たちには「文化の多様性を尊重し、誰もが生まれてきて良かったと思える地球社会の創造を目指し、以って各自の生命（いのち）の価値を高める」というビジョンがありますが、その目的を果たすためにはこの組織に専断的に関わる人材のみならず一般市民の貴重な力添えが欠くことができません。

支援の必要なところに必要な方法で手を差し伸べてくださる方々、多くの人々の気持ちが結集したお陰で市民型である本会の活動が継続できたのです。



アジア協会アジア友の会イメージ写真

私たちは、事業の成果はもちろんですが「人のつながり」を一番の財産と考えます。それは海外での活動展開にも重要です。現在、本会は18カ国に60の提携団体を持ちます。私たちは設立当時よりこのネットワークを大切にしています。アジア地域の発展にはアジア地域における「相互理解と協力と連帯」の輪づくりが不可欠であり、その輪づくりの鍵は国境を越えて友情と信頼に根ざした人と人とのネットワーク、つまり人脈の基礎的な積み重ねを実施するために1990年より年に一度そのネットワーク団体が集まり、アジア国際ネットワークセミナーを実施してきました。その間、アジアでは国内紛争、政治的混乱、気象異常、自然災害そして経済発展と大きな変化を歩んで来ました。同時に我々はアジアのネットワークを通して、お互いの経験、文化、夢、期待、仕事などの計画を交換し、分かち合うことを積み重ねてきました。その積み重ねの成果として、活動30周年を契機に本会では『アジアフレンドシップ 夢基金』を創設しました。



アジア国際ネットワークセミナー

この基金は、経済発展の陰で危機的状況にある人々に夢をつくることを考え、それを支えあうネットワークを目指し、アジアの市民みんながお互いの為に支えあうための基金です。実際、経済発展を目覚しく遂げたアジア諸国には多くの富裕層だけではなく、中間層の人達の著しい増加を見ることが出来ます。

■ 貧困の連鎖を断ち切る支えあい

しかし一方では、今日のご飯をどのようにして我が子に食べさせようかと、何もない我が家に呆然とする母親が今もいるのです。貧しさからいつもひもじい思いをしている妹や弟に美味しいものを食べさせてやりたいと願う姉や兄が今この時も存在する事実があります。

本会がネパールで18年前より実施している学校給食。学校給食といっても毎日の食卓で口にすることができない良質なたんぱく質の摂取を主にした卵と牛乳の給食です。

それも週に一度の給食です。子ども達が健康で元気に健やかな成長ができる学校生活であることを望む先生たちや、お母さんお父さんの願いに支えられ細々と続けてきたこの給食活動。子ども達は抵抗力が付き健康的になっていきました。そして、ようやく一昨年前よりネパール政府が小学校での給食を実施始めました。食事には程遠いメニューですが、毎日学校で食べ物が提供されることは成長盛りの子ども達にとって、本当に素晴らしい改善がされました。子ども達は1カ月にもどくらい卵を食べることが出来るようになったかと状況を知りたく質問をすると、約5%の子どもが給食以外に週に一度食べているとのことでした。



ネパールー給食の様子

しかし半数以上の子どもがこの給食の時だけ卵を口にできるといいます。給食を始めた1993年当時は卵の味を知らない子ども達が8割以上であったことを考えると大変な違いですが、それでも家庭では卵は大変なご馳走で食卓に並ぶことは無いのです。

今年の1月、ネパールでの現地活動中にこんな出会いがありました。

『今日は本会が運営する週一回の卵と牛乳の給食の日。久しぶりに子ども達との給食の時間です。落ちないようにゆでた卵の殻を慎重にむいて、どの子も美味しそうに卵を口にしています。そんな給食の時、ある5年生の少女が一人、みんなが食べているのに早々に立ち上がり、建物の影に行こうとしています。そして右手が不自然な形でスカートのポケットに突っ込まれたままでした。「もう、食べ終わったの?」と私が尋ねるとその少女はなんだかもじもじしながら「うん」とだけいいます。「その右手、何かしたの?」ともう一度尋ねると、「実は、卵を持っているの」と小声で答えました。そして、そっと見せてくれた少女の手には、彼女が食べるはずの卵がありました。年の離れた弟に家では食べることができない卵をこうしていつも持ちかえり、食べさせているのだと恥ずかしがって事情を言わない彼女を気遣って友達が駆け寄ってきて私に説明してくれました。「あなたは食べたくないの?」と聞くと、「私は小さいときに給食で食べさせてもらって、こうして大きくなれたので、今度は弟に元気に大きくなってほしいから、いいんだ」と、弟への深い愛情をいっぱいと感じさせる返事をする少女』。

彼女も本当は卵を食べたいであろうし、成長のためにも食べたほうが良いはずですが。一見、素晴らしい兄弟愛の話のようですが、僅か5年生の子どもが毎回この繰り返しをしていくことは決して良いことではないはずですが。

「ぜいたくな生活をする人たちが、物資を消費しすぎるために、一方に乏しすぎる暮らしをする人の多くなる社会は、理想の社会ではありません」と言われた日本で初の女性新聞記者となった羽仁もと子さんの著作集に書かれている一説を思い起



一つの皿を3人の親子で食べる食事

こしました。

いつの時代にも生活の格差はあります。しかし、それに対して皆がどう動くかです。どう支えあうかです。その支え合いをもう少し大きなつながりでしていこうというのが、アジアフレンドシップ夢基金です。これまでは日本からの支援を受け発展をしてきた海外援助の受益者であるアジアの民衆が他者を助ける為に自らのお金を国際基金に出し、受け手であった人々が支援する側に立つというものです。これはアジアの人々にとって画期的な意識の転換です。他者を助けることは本当の自立の一步です。本当の自立を目指した取組みです。

この基金の使い道は

集められた資金は国際共同管理の下で、水・子ども・貧困・環境などの分野への支援や災害緊急援助など必要な事業に役立てます。

特に、弱者である子ども達が夢を持てるように以下のような具体的な支援を行っていきます。

1. アジアの各地でのチャイルドアカデミー設立
＝悲惨で過酷な状況にある子どもたちに、識字・給食・技能取得の場を作ります。教育を受ける機会を持たない子ども達に将来の夢を描くことが出来る仕組みを作ります。
2. マイクロ・クレジット（貧困対策・生活自立）
支援＝生活を自立させていくために基本資金となる小額貸付（マイクロ・クレジット）。アジア各地のNGO貧困対策活動への必要資金の貸し出しを行います。
3. 地球環境保全活動・青少年育成活動＝青少年によるグリーンスカウト活動（地球環境保全活動）や将来の世界を担うアジアの若者同志の交流事業を促進し、地球の未来に貢献する人材の

発掘と育成を目指します。

この基金は本会のネットワークがある18カ国で同時に募金活動をスタートしています。各国でその基金への動きが始まりました。特にインドでは、新8団体が基金の主旨に賛同し本会ネットワークに加わり現在21のネットワークへと広がっています。フィリピンでも同じように賛同した新3団体の加入があり9のネットワークとなりました。

たくさんの力を添えて、たくさんの笑顔に出会えるように、アジアの人々が国を越え手を携えて、20世紀に遣り残した社会構造－貧困の連鎖【貧しいから学校に行けない→読み書き計算が出来ない→安定した職業につけない→収入が少ない→子どもを学校に就学させられない】から抜け出す道を作ろうとしています。

インドには、我々の支援によりできた井戸のお陰で、一日中水を汲むために費やしていた時間を学校に通い学ぶ機会を得、その後大学で教えるまでに変化を遂げた男性がいます。彼は、「僕の村に井戸が作られなかったら今こうして教師をすることは無く、村で今も水汲みをしていたかもしれない」と言います。

今、私たちが出来ることは、社会から置き去りにされていることがらに無関心にならないことです。それぞれに役割を持って生まれてきた子ども達を社会の一員として、社会に役立つ一人として育てていくことです。

その次世代を担う子ども達の育成とアジア相互の支えあいを達成するために、今年第2回アジア国際ユースサミットを開催します。「地球の未来に向って～持続可能なコミュニティを目指して～地域の中で子ども達の幸せを実現するために」



インドー完成した井戸

をテーマに8月20日～24日までの5日間、アジア15カ国の高校生と日本の高校生が高校生の今できることを共に考え話し合う場です。このサミットの日本での開催を通して、アジアの高校生の日本への理解を深め交流を図り、①地域社会に貢献できるアジアのリーダーの育成 ②地域社会の活性化 ③アジアの高校生の日本への理解と交流 という3つの目的により、「Think Globally, Act Locally (地球レベルで考え、地域で行動する)」ことが出来る地域のユースリーダーの育成とネットワークの構築を目指します。

本会の従来の役目であるアジア諸国において基本的生存条件が欠けている地域への協力・支援をする国際支援活動は変わりなく実施していきます。加えて上記基金の輪を広げることにより、そして、若い世代の育成を同時に実施していくことが“より人間らしい地球社会の創造のために 貧困なき、一つなるアジア (One Asia Community) を目指してアジアに「理解と協力



第1回アジアユースサミットの様子

と連帯」の輪を広げる”ことを目指しつつづけている本会の役割として考えています。

アジアフレンドシップ夢基金はアジアと世界に貢献できる身近な国際協力活動です。一口1,000円の基金を出し合うことによりできるボランティア活動に参加することで、あなたにも見えてくる世界の動きがあるはずですよ。

最後に

3月11日、東日本を襲った大震災の様子は、インターネット回線、デジタル回線が整った今、私たちが関わっているアジア諸国にもほぼ同時に伝わっていました。しかし、支援地域である農村部ではテレビの普及率も低くその実情を明確に知る人達が少ない中であるにもかかわらず、「これまで長年支えてくれているJAFSのある日本が大変な状況になっているのに、私たちが何もしないわけにはいかない。皆で募金活動をします」との申し出がアジア各国より入りました。日頃から本会を通じて現地とのかかわりが「つながる」行動へと展開したのです。ここに32年間市民活動体として地道な活動をつづけてきた“草の根の交わり”の強さを感じることができました。微力ではありますが、そのアジア諸国よりの募金、そして本会の活動を信じてお送りくださった義損金などにより南三陸町での支援活動を実施しています。

第262号 自治体国際化フォーラム8月号

平成23年7月15日発行

編集人 緒方 俊則

発行所 財団法人自治体国際化協会

〒102-0083

東京都千代田区麹町1-7

相互半蔵門ビル

Tel. (03) 5213-1722

Fax. (03) 5213-1741

Homepage <http://www.clair.or.jp/>

E-mail forum@clair.or.jp

編集協力・印刷 第一資料印刷(株)

本書からの無断複写・転載を禁じます。

本誌は再生紙を使用しています。

編集後記

3月11日に発生しました東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

今月号の特集は、「東日本大震災における外国人支援について」です。被災地における地域国際化協会等における地震直後からの外国人支援の状況やそこから見えてくる課題や災害時の外国人支援のあり方等、大変参考になるものだと思います。

さて、東日本大震災への支援をいただいた韓国では、2011年8月から大邱広域市において、第13回世界陸上競技選手権大会が開催されます。私が陸上競技をかじっていたこともあり、この機会に、大会の会場に足を運んでみたいと思っています。本大会では日本の短距離女子選手を中心に注目を集めていますが、日本に元気を与えてくれるような走りに期待しています。(M・S)